2018.6.1

現代俳句千葉

129号

巻頭エッセイ

切っ掛け

事務局次長　イザベル真央

現代俳句協会入会の切っ掛けは、炎環同人の佐藤良重さんに勧められてのことでした。炎環に入会したてのころ流山句会で五句提出し、寒太先生に直された五句を炎環誌上に投句するのが新人のならいとは知らなかったもので、新たに自己流に五句作り炎環誌上に投句していました。俳句もどきの句ばかりでしたが、王子句会の世話人をしていた佐藤良重さんが、こういう句は炎環では受け入れられないから現代俳句協会に入ったらと再三声をかけて下さいました。

寒太先生のご指導のもと年月を経て炎環調になり同人にもなっていましたが、超結社の人と句会ができる魅力を感じて柏、津田沼の両俳句研究会に足を運びました。大畑等前会長と句座をともにすることが出来たことは新鮮な喜びであり、平成二十七年現代俳句四月号に地区協注目作家として私の句を七句掲載して頂けたことは終生の記憶になりました。しかし同世代の佐藤良重さんも大畑等さんも、もうこの世にはいないのです。

二十年以上前、俳句をはじめたばかりの頃のことです。流山市主催の吟行会が一茶の故郷長野県でありました。流山市の広報の俳句選者の水見先生と河合先生が同行していらっしゃいました。初心者の私はなぜか両方の先生の特選をいただくことになり、翌月の流山市の広報にのりました。

水見壽男先生特選　風薫る一茶の里に立つてをり　真央

河合凱夫先生特選　黒姫や目覚めて赤き蛇苺　〃

喜び勇んで流山の句会で寒太先生に報告したところ、「僕の特選をとらなくては駄目だ」と一蹴されました。俳句とはある意味苦難の道だと知ることになります。寒太先生の特選を頂けたのは、それから何年も後になります。石寒太先生は唯一、私の俳句の師であります。

目　次

切っ掛け　イザベル真央	1
定期総会	2～3
俳句大会	4～5
春の吟行会	6～7
諸家近詠	8～10
私の感銘句	11～12
津田沼研究句会報告	13
青葉研究句会報告	13～14
柏研究句会報告	14
新会員・会友紹介	14
図書紹介　ひろば	15
会員・会友の近況	15～16
掲示板	16

千葉県現代俳句協会会報

平成三十年度
定期総会・俳句大会開催される

平成三十年三月十八日（日）千葉市文化センターにおいて平成三十年度の総会・俳句大会が開催された。並木幹事長の総合司会で、檜垣副会長の開会の辞、秋尾会長の挨拶に続き椎名鳳人氏を議長に選出。
総会は会員参加者七十一名、委任状一八〇名で定足数を満たした。
来賓に東京都区栗原節子副幹事長、東京都多摩地区永井潮幹事長、神奈川県尾崎竹詩事務局長の三名の方々をお迎えした。

定期総会

総会では以下の五議案（枠内横書き）について審議し何れも可決。
渡辺副会長の閉会の辞を以て終了した。

秋尾　敏会長

椎名鳳人議長

来賓・顧問の方々

会場風景

〔第１号議案〕

平成29年度事業報告

1．行　事

(1)　定期総会および俳句大会
- ①　平成29年度総会　３月19日（日）　出席者　90名
　　千葉市文化センター
- ②　同上 俳 句 大 会　同上　参加者　90名
- ③　同上 懇　親　会　三井ガーデンホテル千葉　参加者　51名

(2)　吟　行　会
春の吟行会　４月29日（祝日）
谷津バラ園・谷津干潟　会場：船橋市勤労市民センター　参加者　70名
秋の吟行会　10月25日（水）
一茶寄寓の地「流山」　会場：流山市生涯学習センター　参加者　60名

(3)　研 究 句 会
- ①　津田沼研究句会
　　毎月第２火曜日　午後６時より　津田沼１丁目町会会館
　　12回実施
- ②　青葉研究句会
　　毎月第４木曜日　午後１時30分より　千葉市民会館
　　11回実施　うち９月は吟行会（小石川後楽園）、
　　11月は現代俳句協会創立70周年記念大会のため休会
- ③　柏 研 究 句 会
　　毎月第２土曜日　午後１時より 柏市「ハックルベリー」
　　12回実施

(4)　ミニ吟行会　１月22日（日）
新春の南房総探訪　会場：鋸南町立中央公民館　参加者　30名

2．幹　事　会

定例幹事会

第１回	１月24日㈫	船橋市勤労市民センター
第２回	５月23日㈫	同上
第３回	８月29日㈫	同上
第４回	11月28日㈫	三井ガーデンホテル千葉

3．会報の発行

124号（３月１日刊）
125号（６月１日刊）
126号（９月１日刊）
127号（12月１日刊）

4．会 員 数 等（平成29年12月31日現在）

会員　358名、　会友　24名、　計382名

【主な異動】
入会　11名（新会員　11名、転入会員　0名、新会友　0名）
退会　33名（会員　33名）、会友　1名
(内)　物故者 ・会員 7名
　　薄井智介（28年度）
　　岩見ちづる、神津冨士子、河辺智文、片山依子、
　　益田　清、松下總一郎

〔第２号議案〕

平成29年度会計報告　[平成29年1月1日～12月31日]

収 入 の 部

(単位：円)

費　　目	予算額(a)	実績額(b)	対比(b)/(a)	摘　　要
前年度繰越金	1,240,450	1,240,450	100.0	預金、現金
諸事業収入	1,300,000	1,357,600	104.4	俳句大会、吟行会
助成金収入	750,000	734,720	97.9	本部より
会友費収入	50,000	48,000	96.0	2000×24名
雑　収　入	10,000	10	0.0	預金利子
合　　計	3,350,450	3,380,780	100.9	

支 出 の 部

(単位：円)

費　　目	予算額(a)	実績額(b)	対比(b)/(a)	摘　　要
会　議　費	120,000	59,748	49.7	幹事会(4回)他
会報発行費	500,000	509,014	101.8	4回発行（送料共）
通　信　費	55,000	43,840	79.7	郵送料他
行　事　費	1,000,000	1,047,674	104.7	俳句大会、吟行会
印　刷　費	250,000	251,465	100.5	チラシ、総会案内葉書、封筒
消耗品費	35,000	48,345	138.1	
交　通　費	120,000	76,640	63.8	各所出張費
交　際　費	100,000	81,665	81.6	関東ブロック会議、他
70周年記念協賛金	381,000	381,000	100.0	1000×381名
雑　　費	10,000	3,786	37.8	振込料他
予　備　費	779,450	0	－	
合　　計	3,350,450	2,503,177	74.7	

次年度繰越金

(単位：円)

収　入　合　計	3,380,780
支　出　合　計	2,503,177
次年度繰越金	877,603

財 産 目 録

(単位：円)

千葉興業銀行野田支店	858,527	普通預金
現　　　金	19,076	
合　　　計	877,603	

〔第３号議案〕

監査報告書

平成２９年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正当に処理されていることを確認しました。

平成３０年１月２３日

監査役　吉野　精

監査役　内田庵茂

〔第４号議案〕

平成30年度事業計画（案）

1．行　　事

(1) 定期総会
- ① 平成30年度総会　3月18日(日)　千葉市文化センター
- ② 同上　俳句大会　同上
- ③ 同上　懇親会　三井ガーデンホテル千葉

(2) 吟行会
- 春の吟行会　4月29日（祝日）
  - 吟行地：千葉市動物公園　会場：千葉市生涯学習センター
- 秋の吟行会　10月
  - 吟行地：未定

(3) 研究句会
- ① 津田沼研究句会　毎月第２火曜日　午後６時より　津田沼１丁目町会館（2句事前投句方式）
- ② 青葉研究句会　毎月第４木曜日　午後１時30分より　千葉市民会館（３句事前投句方式）
- ③ 柏研究句会　毎月第２土曜日　午後１時より　柏市「ハックルベリー」(5句当日投句方式)

(4) ミニ吟行会　1月28日（日）
- 吟行地：一宮・玉前神社周辺　会場：旧寿屋本家

2．幹事会

(1) 定例幹事会
- 第１回　1月23日(火)　船橋市勤労市民センター
- 第２回　5月22日(火)　同上
- 第３回　8月　未定
- 第４回　11月　未定

3．創立40周年記念事業について

随時

4．会報の発行

128号（ 3月刊）　130号（ 9月刊）
129号（ 6月刊）　131号（12月刊）

〔第５号議案〕

平成30年度予算(案)　[平成30年1月1日～12月31日]

収 入 の 部

(単位：円)

費　　目	予　算　額	前年度予算額	摘　　要
前年度繰越金	877,603	1,240,450	
諸事業収入	1,300,000	1,300,000	俳句大会、吟行会
助成金収入	730,000	750,000	
会友費収入	50,000	50,000	
雑　収　入	397	10,000	
合　　計	2,958,000	3,350,450	

支 出 の 部

(単位：円)

費　　目	予　算　額	前年度予算額	摘　　要
会　議　費	100,000	120,000	幹事会他
会報発行費	500,000	500,000	4回発行（送料共）
通　信　費	50,000	55,000	
行　事　費	1,000,000	1,000,000	俳句大会、吟行会
印　刷　費	250,000	250,000	チラシ、総会案内葉書他
研究研修費	50,000	0	協会活動の活性化
消耗品費	40,000	35,000	
交　通　費	100,000	120,000	関東ブロック会議、他
交　際　費	100,000	100,000	関東ブロック会議、他
本部70周年記念協賛金	0	381,000	
雑　　費	10,000	10,000	
予　備　費	758,000	779,450	
合　　計	2,958,000	3,350,450	

平成三十年度　俳句大会

（後援　千葉県教育委員会・千葉市・毎日新聞社・千葉日報社）

午後からは俳句大会が開催された。大会参加者は八十二名。司会は髙橋事務局長とイザベル事務局次長、披講は羽村・星野両幹事と徳吉広報部長が担当した。

大会終了後の懇親会には来賓三名を含め、四十八名が参加した。司会は徳吉広報部長。写真撮影は午前午後を通して細野企画部長。

俳句大会の成績は左記の通り。

【事前投句の部】

〈入賞者作品〉

●千葉県知事賞
八月の拳いくつあっても足らぬ　加藤　法子

●千葉県現代俳句協会賞
どんと置く冬瓜ここが現住所　髙橋　健文

●千葉市長賞
煮凝りに入れておきたい昭和かな　青木　一夫

●毎日新聞社賞
コスモスや無風のときに息をする　浦野　五郎

【席題の部】　席題「凧」「声」
（二句の合計点による。掲載句は二句のうち一句）

〈入賞者作品〉

●千葉県現代俳句協会会長賞
連凧や岬の鼻をひっかけて　加藤　法子

●千葉県教育委員会教育長賞
凧の糸離さぬように反抗期　長濱　聰子

●千葉日報社賞
奴凧野っ原がある海がある　森村　文子

〈特別選者特選句〉

（秋尾敏特選）
三つ目の凧あげしまま居なくなる　楠見　恵子

（栗原節子特選）
暮るるまで鳥の声してあたたかし　鈴木まんぼう

（永井潮特選）
いかのぼり引きちぎらるる生家見き　吉岡　一三

（尾崎竹詩特選）
つくづくしこんなにたくさん子供の声　森村　文子

（武田伸一特選）
いかのぼり引きちぎらるる生家見き　吉岡　一三

（鳴戸奈菜特選）
自由にして不自由極まる凧　小出　治重

（小出治重特選）
父のない子の凧宇宙遊泳す　岡田　淑子

（塩野谷仁特選）
狼か兜太の声か涅槃西風　髙橋　由樹

（三苫知夫特選）
狼か兜太の声か涅槃西風　髙橋　由樹

（横須賀洋子特選）
さくらさくら産声は上がらない　高野　春子

（並木邑人特選）
春霞黙を集める声がする　林　阿愚林

（渡辺澄特選）
奴凧野っ原がある海がある　森村　文子

（檜垣梧楼特選）
神獣鏡卑弥呼の声出す春の宵　羽村美和子

（高木一惠特選）
天の声地の声フクシマ雪解まだ　三苫　知夫

〈四～三十一位入賞者作品〉

安穏はいつも束の間凧落つる　鈴木まんぼう
春宵や無声映画のチャップリン　岡田　淑子
濁声の男あつまる蝶の昼　清水　伶
兜太なき空淋しいぞ奴凧　並木　邑人
遠き日の凧の一つを胸に飼う　塩野谷　仁
凧は高く民への目線低くあれ　髙橋　由樹
朧夜の絵本読む声しずかなり　楠見　恵子
天国を見て来た凧を引き戻す　尾崎　竹詩
空も海も無防備の洲懸凧　三苫　知夫
列島がかるくなるなり凧　鈴木　瑩子
おぼろ夜の声を発せり猫目石　下村　洋子
声となる声なき声やむつごろう　國分　三徳
落つ凧の軌跡の中の特攻機　東　國人
みちのくの空は遠くていかのぼり　細根　栞
霾ぐもり防人の声のせて来る　平岡　育也
声をかぎり磯巾着が原発ＮＯ　吉岡　一三
凧と子のちから大地に引っ掻き傷　たけなか華那
家絶えし里に絡まる凧の糸　保坂　末子
捨て家に別れを告げるいかのぼり　林　阿愚林
連凧の先は四次元かも知れぬ　羽村美和子
春愁に濃淡ありぬ天の声　小林　実
臍の緒の切れし凧着く火星かな　池田　幸
声にして泣いてはならぬ桜の木　渡辺　澄
願望は住所不定の凧　横須賀洋子
ゆるやかに宇宙をめぐる兄の凧　片岡伊つ美

石仏の声を聴くまで霞みおり　戸邉　光一
白木蓮声ともならず深い息　野口　京子
いかのぼりきのうの風を聞いてゐる　高野　春子

〈その他作品　受付順〉

王道を貫く梅の声真白　椎名　鳳人
春の木戸ちゃん付けで呼ぶ友の声　菱木　良一
空欄を埋め尽くせよ春の声　小野　功
ふるさとの空の深さやいかのぼり　山﨑　幸子
凧の手を放す秩父嶺遥か越え　細野　一敏
天界ははるかなところいかのぼり　髙橋　健文
凧落ちてタコの干物の出来上る　三須　民恵
傘寿くる心中に凧高々と　なかもと淑子
こんなにも蒼空とけゆく春声　上野　紫泉
浜風や糸きな臭き喧嘩凧　内田　庵茂
吠猿の声の溶けゆく朧月　松本　千花
奴凧無頼の風を横目にす　矢野　忠男
大宇宙の声を集めて春の風　小出　治重
俳句元気「そだね」「そだね」の花の声　高木　一惠
夜ノ森のくるくる回る凧の糸　イザベル真央
凧上りつられてくしゃみ辛夷咲く　大塚　弘毅
声あげて世界の春を歌いましょう　吉野　精
桑の葉を嬰つかみけり声あげて　檜垣　梧樓
蛇穴を出でて漏らしぬ甘へ声　永井　潮
声も春外房線の女づれ　栗原　節子
連凧が龍となりたる鳥瞰図　木之下みゆき
蝌蚪の紐数多の声を待つ心地　黒澤　雅代

狂い凧天と地をふと倒錯し　髙橋　宗史
朝の公園凧反核の尾を垂らし　武田　伸一
春塵に森の乱声戦車来る　秋尾　敏
空家から洩るる人声つくしんぼ　徳吉洋二郎
朧の夜自分の声におどろいて　星野　一惠
春寒し声明のごと愛を吐き　松﨑あきら
きれ凧や子に守りたき空の青　青木　暉
過疎の里終日凧のあがりをり　渡部　和秋
春泥に写らぬ凧の勇姿かな　栃木　きよ
ひとり立つ空に十字架千葉に凧　白木　暢子
分別を一掃している雉子の声　福田志津子
登らない凧を引き摺り去年今年　加藤昌一郎
不機嫌な空で袖凧困らせる　久野　康子
遠来の旅人のごといかのぼり　池田　博臣

風神に阿る凧のみぎひだり　長井　寛
メモ書きを声出して読む朧の夜　小川トシ子
凧の糸まだ喪心をひきずって　石井紀美子
いかのぼり上総の海へ里ごころ　大見　充子
太陽の真下兜太のいかのぼり　林　ゆみ
反戦の大声響く梅の天　佐藤　鈴子
天袋鶴の群舞の声すなり　坂間　恒子
散骨の声なき声に春の雲　川又　優
凧おとなのおもちゃや糸を継ぐ　棗　椿伊
睡い春みな鳥になる不等式　内藤　冨雪
畦道や蛙の声をそっと聞き　金子　こう
春先の電話の声の掠れけり　増田　豊子
蛇穴を出て菩提樹に鬨の声　森　光
歓声は白球を追い花菜風　清野　敦史

句会風景

事前投句の部入賞者（左より：敬称略）
秋尾会長、加藤法子、髙橋健文、浦野五郎

席題の部入賞者（左より：敬称略）
秋尾会長、長濵聰子、加藤法子、森村文子、千葉日報社岡田部長

懇親会風景

春の吟行会
「千葉市動物公園」に遊ぶ

会場　千葉市生涯学習センター　平成三十年四月二十九日（祝日）

動物園入口

千葉モノレール動物公園駅の改札口を出ると、一面に新緑が広がり、あまりの眩しさに圧倒される。集合場所は千葉市動物公園入口で、幹事の方々が出迎えて下さった。正門入口より入場し、園内を自由に散策。

千葉市動物公園は、人間に深い関わりのある動物との触れ合いを通じて、動物の生態を学べる、家族ぐるみのレクリエーションの場として、昭和六十年に開園され現在に至る。

園内は「昭和の日」の休日という事で、子ども連れで賑わう。道なりに行くと、餌に群がるスリル満点の日本猿。フクロテナガザルの奇妙な鳴き声と腕渡りのパフォーマンス。俳人好みのゴリラ、存在感のある象とキリン。人気者のレッサーパンダの「風太くん」。細長い角が美しいシロオリックス。昼寝中のライオン、白黒のマレーバク。動かない鳥で有名なハシビロコウ。オレンジ色の大きな嘴が特徴のオニオオハシ、駝鳥にフラミンゴ等々。中央広場では子ども達が水遊びに興じ、見どころ満載。

十一時過ぎに動物公園を後にし、モノレールで句会場の千葉市生涯学習センターへ移動。受付をして十二時半二句出句。句会は午後一時より並木副会長の挨拶で始まり、参加者は五十五名。俳句達者の面々は数多の景を切り取り、動物園吟行ならではの佳句を詠まれ、四句選に迷う筆者でした。

園内風景

象

ライオン

披講、点盛後に休憩。会長、副会長の講評は特選句を含め五句を丁寧にされる。秋尾会長の「選句基準は吟行のウイットに富んだ句だけでなく、後に残る句を選びたくなる」と言う言葉が印象的でした。最後に成績発表、上位入賞者の表彰。渡辺副会長の挨拶で四時前に盛会裡に閉会される。

司会は徳吉洋二郎・木之下みゆき、披講は髙橋健文・星野一恵・羽村美和子の各氏。

句会後、有志による懇親会が行われた。参加者二十八名。

細野一敏さん他、企画部・事業部の皆さん、会計の野口京子さんには大変お世話になりました。いつも有り難うございます。

（林　ゆみ記）

〔一～二十位入賞者作品〕（二句のうち一句）

①時々人になる春愁のゴリラ　岡田　春人
②昭和の日象は鉄鎖を引き摺って　徳吉洋二郎
③修司忌やキリンは黒き舌のばし　越野　雄治
④ゴリラ客観す惜春のホモサピエンス　長濵　聰子
⑤生真面目な象のおしりや夏きざす　久野　康子
⑥森の人よ春の鴉は実に多弁　諸藤留美子
⑦晩春のすきまライオンの哲学　山口　明
⑧完黙を貫くハシビロコウ薄暑　髙橋　健文
⑨春深し所帯じみたるキリンの尾　赤羽根めぐみ
⑩昭和の日戰を知らぬけものたち　吉野　精
⑪ライオンの檻にたんぽぽクローバー　下村　洋子
⑫濃密な五欲の春の虎がくる　松﨑あきら
⑬風光る目が合っちゃったゴリラとわたし　富澤ムツ子

⑭五月来る猿もも色に横たわる　岡田　淑子
⑮夏木立荷物の中に水の音　渡辺　澄
⑯瞑想のゴリラ横向き花は葉に　星野　一惠
⑰風ばかり見ている晩春の麒麟　高野　春子
⑱目は風だ走れ駝鳥よ追え夏を　平岡　育也
⑲園内のいのちの匂ひ冷し飴　森井美恵子
⑳駝鳥が歩くさみどりの地平線　木之下みゆき

【特別選者特選句】

（秋尾敏会長　特選）
文明的だ春のライオン石に寝て　市川　唯子

（並木邑人副会長　特選）
万緑のハシビロコウは昼星見　林　ゆみ

（渡辺澄副会長　特選）
修司忌やキリンは黒き舌のばし　越野　雄治

（檜垣梧樓副会長　特選）
ゴリラ客観す惜春のホモサピエンス　長濵　聰子

（高木一惠副会長　特選）
生真面目な象のおしりや夏きざす　久野　康子

【その他作品】（二句のうち一句、受付順）

春の歌聴いていそうなカンガルー　細野　一敏
考えるゴリラ食事は葉桜か　髙橋　宗史
猿春眠言いたいことは山ほどある　秋尾　敏
ひなげしに獅子の咆哮境界あり　高木　一惠
二足歩行風太動かぬ昭和の日　野口　京子
縦書きは嫌いヘビクイワシに東風　並木　邑人
ライオン咆哮サバンナの風を引き寄せる　羽村美和子
その先は行っちゃいけない春の象　林　阿愚林
シッダルターのごと洞窟のゴリラ　檜垣　梧樓
春昼の気だるき相棒霊長類　イザベル真央
磨崖仏のごとゴリラの惜春　上野　紫泉
白詰草檻のライオンの平和　三宅たくみ
子は猿を子の母は子をみるうらら　たけなか華那
吠猿のたましいの声春の汗　黒澤　雅代
堂堂とゴリラの黒目風光る　大見　充子
初夏ですよレッサーパンダ起きなさい　小川トシ子
ライオンや余生は此所と大欠伸　髙橋　博
フラミンゴ羽搏き強し美容柳　内田　正成
猿園の手摺を顎に夏帽子　澤田　寿一
技を驕らず緑陰のテナガザル　田村　隆雄
うららかや霊長類の端にいて　藤田　富江
ゴールデンウイーク平和の象の鼻　田沼美智子
春闌くや曾孫・玄孫もゐる風太　内田　庵茂
囀や象を殺せしを忘れまじ　山﨑　幸子
薫風に動物園の匂ひかな　棗　椿伊
ゴリラ拗ねる有季定型春愁　加藤　法子
縞蜥蜴喉ひこひことぺこぺこと　石井紀美子
ふくろ手長猿絶叫絶叫若葉風　鈴木まんぼう
サラダ菜のような木洩れ日五月来る　保坂　末子
春本番象の愛子はタップ踏む　矢野　忠男
駆け抜ける野性の叫び夏木立　横山　郁子
初夏の駅迷子仲間にほっとする　菱木　良一
花は葉に象のまなじり濡れている　小林　実

句会場風景

秋尾会長と上位入賞者
（左より、敬称略）
秋尾会長
徳吉洋二郎
岡田春人
越野雄治

■秋の吟行会のお知らせ

日時　平成三十年十月二十九日（月）
場所　名水百選の君津市久留里の街並み散歩
句会場　上総地域交流センター（上総公民館）
＊詳細は次号（九月一日刊）でお知らせします。

諸家近詠

河合　利枝
公孫樹背に紙垂揺るる撞鐘も
枝縫って竹の伸び行く初御空
梅林に心残しつ十月桜
梅雨兆す傘屋帽子屋隣組
線香の煙る仏壇梅雨長し

長井　寛
朧なる網に打たるる一角獣
春がすみ宙にまなこを置き忘る
俳諧を七曲りして花は葉に
須佐之男命に斬らる蜥蜴の尾
破芭蕉ばさりと昼を裏返す

小野　裕文
明け方の夢にとびこむ猫の恋
かたつむり何もない日もいそがしい
幸せの完全雇用蟻の列
ひまわりや互いに若き志願兵
かなかなや遺品の整理また日延べ

木下　昌子
冬蝶へ再生可能エネルギー
わくわくを食べた鳥より囀れる
甘いので昭和へ半分置く西瓜
ことに口よく動きたる敬老日
火事跡へ汀のごとく人の立つ

神作　仁子
働いてご飯を食べて建国日
硝煙も沈丁の香もしのび寄る
ぶらんこの鎖月より下がりをり
君が代の低唱とどく黴の花
身の内に秘境がありぬ竜の玉

塩野谷　仁
春昼の木々に声なし兜太亡し
巨星墜つこの淋しさを金縷梅咲く
春の野の人に曇天熟れてゆく
真夜転げくるまろうどと花片と
真夜中の椿ひとつは月に落つ

清水　伶
てのひらに天網はあり冬すみれ
尼寺という雪うさぎ雪うさぎ
瞬(まばた)きのこぼれやすくて蝶の昼
たましいの有耶無耶ひとつ桜騒
深爪の男あつまる桃の花

齋藤　溥子
白椿見れば眼奥黒き波
春めきて主婦の仕事の走り出す
菜の花や地上の太き一直線
ＡＩの未来は知らぬ木瓜の花
空つかむシナマンサクの望郷

金澤　惠子
蛇出でて新燃岳の火山灰かぶる
春めくやネールカラーにラメを選る
遅桜嫌いな奴に会いに行く
ミキサーの渦はさみどり今朝の冬
蛇穴に入る物騒な世は御免

白木　暢子
七年を雨降るごとく受け入れる
雛飾りやらず仕舞いの悔いを抱く
慣れぬままひとりぽっちに菜の花に
桜散り終始一気に風の中
一抹の不要不用を見極める

清水　重陽
通学路道なき道の雪を掻く
薫風裡聖路加タワー仰ぎ見る
話みなうなづくばかり花疲れ
木蓮の風受け反古の如く降る
十薬のはびこる月極め駐車場

里見　さち
目ぐすりの一滴寒の月ゆらぐ
待春や同時に入る上下線
三寒四温押入れに風ひそむ
天ぷらにモンゴルの塩鳥雲に
初蝶の大きな影のぶつかり来

島田　翠松
ものの芽や邪念じゃねんとすぐ捨てる
花の朝ほんとの私戻って来た
桜さくら急坂上ればなお万朶
「なあーともないよ」医師笑む亀の鳴く
チバニアン磁場逆転の春あらし

鈴木　一行
スキップは子供が得意しゃぼん玉
砂時計日時計春の雨の音
さざなみのような遠くの桜かな
それぞれの場所に置かれて花の屑
風船を繋がれていて仔犬かな

佐藤美紀江
老木の桜落葉やポトマック
子沢山締めの雑炊いつも父
ゆっくりと老いし二人や蕗の薹
遅日なり自分の壁の重きこと
文字摺草重要書類託さるる

諸家近詠

久保　筑峯

花栗の香や足裏より夕暮れる
追懐の草行露宿鵜飼舟
来し方を丸ごと齧る冬りんご
印旛沼眠る男の如く冬
寒椿落花し色即是空かな

佐々木幸子

春の泥いまだ五欲を捨て切れず
翁草何か言わねば明日がない
灯さずに春の愁いの中にいる
はるかぜのかたちに翔る鳥の群
野良猫の恋猫となり寺に棲む

鈴木まんぼう

食はるるとは想定外の海鼠かな
死なばわれ善き人なりき鰤大根
泥けむり立て合ひ恋の田螺かな
多摩川の仏頂面の鯊を釣る
ケサランパサランそこらかしこや原爆忌

國分　三徳

せがまれて娘のために鯉幟
安曇野は案山子三昧晴れ渡る
あじさいは真っ赤な嘘をついている
無免許のかなぶんぶんにぶつけらる
年輪の育つ音して山眠る

口村　洋子

今宵吾を祖母とならしむ春満月
簡素なる調度の雛となりにけり
そのしぶき浴び白糸の滝襖
遊船の一人となるや片手上げ
六道の戒めまっ黄に石蕗咲いて

小林　実

鎌倉の余寒と言えば虚子がいて
背を押され別の自分になる寒さ
友が来る枯野に鬼の面つけて
四万六千日日々悪相となりゆけり
赤紙のごときが飛んで運動会

坂間　恒子

使徒となる泰山木の花の下
「考える人」に泰山木数華
七月の絶対空間「地獄の門」
木染月扉の奥の汚染水
川鵜翔つとき夕暮れを引き絞る

重田　忠雄

富士山の氷室憲法第九条
春愁を河馬に呑まれてしまいけり
八月や無口な父がしゃべりだす
無住寺の粗き箒目朴落葉
八幡の空に瑕疵なし水の秋

鈴木　房州

せっかちのカーリングのごと落葉掃く
白息やゴジラの如く出勤す
大試験富士の体積解き難し
春眠しスーパーマンのごと着替ふ
小春日や塗装の後を歩く猫

佐々木　禎

菜の花の光のシャワー全身に
鳶の笛四温の岬をふくらます
名草の芽陽のやわらかき雨上り
ものの芽や素手の間隔もどりけり
ひろびろとチューリップ畑端見えず

菅ノ谷文子

花開く人を恋うようにして開く
言霊に国境の無き花見かな
初鳴きや只今マイクのテスト中
花三分誰にでもある羞恥心
花前線長寿の村を通りおり

小張　直子

逝く春の嗚咽か雨の降りやまず
朧の夜優しい人から消えてゆく
死ぬ事は生きたる証し春夕焼
春夕焼父の居そうな雑木山
農魂に覚醒のあり雪解水

黒澤　雅代

麦秋の肩の重さを午後という
日の暮れは木の実に戻る木の実独楽
正論のどこか窮屈石榴の実
寒月光平和はいつもガラス質
心音を描くとすれば寒夕焼

下村　洋子

地の塩とほど遠く居て仏の座
十薬の群れる清貧あめふらし
働いて恋して泣いて十三夜
跳箱の皮の匂いやとおり雨
形なきものまで暮るる寒の入

久野　康子

だるまさんころんだ春落葉ざくざく
一面の花韮大地目覚めけり
まんぼうを呑みこんじゃった春の月
可惜夜（あたらよ）の夢にピリオド春の猫
赤毛のアンの少女老いたり花蘇枋

諸家近詠

鈴木　和子

手を合わすただそれだけの春の凪
冷奴余生笑って暮らしたい
じゃんけんに負けて泣く子も夕焼ける
鍵穴がカチリと秋の音たてる
病院の廊下に人の世今朝の秋

澤田　寿一

もどかしき男盛りを蛍烏賊
春うらら草加松原曽良の道
かくれんぼ何時か来た道曼殊沙華
叱られて老を楽しむ花カルタ
含羞の夢を走らす夕端居

小出　治重

人心を無視して永き春疾風
白酒の昔ありけり土間の家
鳥帰るはらからの里へ声掛けよ
妄念を一掃俄に土匂ふ
少年の涙や許せぬ過去ばかり

椎名　鳳人

五七五という化け物や四月馬鹿
冷や五合温めて五合蝦夷訛り
家系図の右が空っぽ春愁
春愁や見えざるものに吾が背中
この辺が潮時じゃろう揚雲雀

清水三千代

ふんばって高みを知らぬ水馬
水底を荒づかいして蓮の花
風死して蔓がせり出す窓の鉢
向日葵にひとり芝居の風姿あり
ねじ終えて身はゆっくりと捩り花

末廣　陽惠

搏動を干と呂の間花や咲く
晴れやかに濃紅の黒椿
物思う夕薄墨の飛花落花
あだなりと名桜に雨惜しみけり
あとはいかに美しく舞う花は葉に

杉山真佐子

石ころの罅たんぽぽから負ける
青嵐卵を割って火がふたつ
熱帯夜湿球へ水足してみる
行き悩む地の七つ星蟬の穴
巻貝となる夏の日を耳に当つ

小多田文子

議事堂の新樹を囲むプラカード
秋歩く横浜赤いくつが鳴る
色あせしセーターの恋捨てられぬ
雑踏を急ぐ目と耳年の暮
春氷柱光の粒を落しけり

越野　雄治

初夢の出口に耳が立つてゐる
玉葱の断面大陸移動説
寝静まる鶏舎の不安冬銀河
寒月やどの蛸壺にも重力波
濹東綺譚口中の煮凝溶け

内田　正成

鉄人逝く天から見てる鯉幟
目出度しや波乗り五輪九十九里
ツツジ咲き香気清らか風通る
鶯が鳴くガラス細工の平和です
春の川不滅の地層チバニアン

近藤　幸子

負ふものを仕舞ひきつたる雛の顔
葉陰より手品のやうに蝶出づる
でで虫の動くを待てる幼き子
鉄線花間合ひほど良く咲きにけり
パレットとなりたる一枚柿もみじ

佐藤　禎子

明かりひとつ狐の域に朗読会
濁り水に鯉の口あり人麿忌
公孫樹の花降る夜グラスは伏せておく
山桜縫い目の粗い衣着て
雉に鳴かれてトランペッターの真昼

窪田　俊作

一月が膨らんでくる紙袋
桜餅買いました人口知能
吊し雛熱くなってる村役場
微睡の自在な形春帽子
春の海戻って来ないブーメラン

黒川　秀夫

だいじょうぶは魔法の言葉あたたかし
水音に曳かれ曳かれてさくらかな
若葉山如雨露を提げて空滑る
紫陽花や卒寿の母の鉛筆画
雨男の亡き父想ふ秋黴雨

栗山美津子

独り身のポーカーフェイス春の宵
桜蕊降りて犬の背装ほへり
夏帽子亡母は満州ハネムーン
秋天へ突き出す十指藍こぼる
雲水の眉目秀麗雪深し

私の感銘句

金澤　恵子

句	作者名	号	頁
また辞書に頼る鬱の字梅雨ごもり	保坂ミエ子	127	4
あいつが死んでからずっと冬晴れだ	三宅たくみ	127	4
色づかぬうちは紛れて烏瓜	森　章	127	4
原つぱにだあれもゐないお正月	松沢　貞津	127	4
声たてず青大将とすれちがう	秋谷　菊野	127	4
庭師来て空を整へ秋あかね	山﨑　幸子	127	5
逢ふときは白いドレスを花辛夷	井上けい子	127	5
葱坊主わっさわっさと子育て中	イザベル真央	127	6
ゆうやけを掃き寄せている部活の子	石井紀美子	127	6
おとうとの小さき工場や夜業の灯	池田　和人	127	6

井上きよ美

句	作者名	号	頁
八月の六日九日水を呑む	髙橋　宗史	124	2
双六の上りに母をまたせおり	栃木　きよ	124	3
炉の灰の嵩よ茶道の半世紀	千野湘山人	124	4
敗残兵兜太「アベ政治を許さない」	並木　邑人	125	8
修正のきかぬ自画像野火走る	富澤さち子	125	10
打水や行つたり来たりの三輪車	前島きんや	126	3
月耿々浮き立つ路地を畏れをり	藤岡　尚子	126	3
流灯会岸を離れぬ妣がいる	田村　隆雄	126	4
蟬時雨バンドネオンは膝で弾く	市川ふみを	127	5
子規の忌やたっぷりと張る風呂の水	青木　一夫	127	6

望月　彩

句	作者名	号	頁
余生など思わぬ頃の夏の空	鈴木　和子	124	4
匙加減出来ぬ性なり石蕗の花	坂本千恵子	125	8
簡潔にもの言う素足なればこそ	倉岡　けい	125	9
冥土への引越準備涅槃西風	村田黙己春	126	2
自己主張強くて孤独白つばき	三苫　知夫	126	2
四葩咲く杓子定規な人の居て	実籾　繁	126	2
観覧車空に放った夏時間	村上千代美	126	3
鉛筆を削り言葉を削る夏	森　章	127	4
汗だくの脳から揮発する都心	森須　蘭	127	4
ひまわりの千の沈黙地震の海	若林　佐嗣	127	5

池田　博臣

句	作者名	号	頁
甕棺に飾るとすれば芒百	髙橋　公子	124	2
夏が来る水平線を引き直し	徳吉洋二郎	124	3
青梅雨やブリキの兵士動き出す	関　千賀子	124	4
春寒料峭盃がひとつ余る	檜垣　梧樓	125	9
我は吾を好きになりたし残る花	鳴戸　奈菜	125	9
どの橋も未知の入口冬銀河	水野　禮子	126	2
百様の祈りの絵馬となりて梅	保坂　末子	126	3
白靴のできること夕餉に帰ること	渡辺　澄	127	5
梅雨長し星の缶詰開けようか	吉野　精	127	5
しんじゅくで別れてからの雪の山	山崎　聰	127	5

夏が来る水平線を引き直し　徳吉洋二郎

海上の水面と空が接する一線である水平線。しかし、それが線として見えるのは人間の錯覚のようであり、行けども続いているのは空と海ばかり。作者はそれらが、夏空と夏の海になるために、自然はその境界線を引き直していると見たのでしょうか。季節の移り変りを、普段は何げなく見ている水平線で捉えたスケールの大きな一句に感動。

澤田　寿一

句	作者名	号	頁
はんざきや活断層に耳澄ます	越野　雄治	124	2
夏が来る水平線を引き直し	徳吉洋二郎	124	3
秋刀魚焼く遠い記憶の火吹竹	高桑婦美子	124	4
囀りを聞き分けているパンの耳	直江　裕子	125	9
修正のきかぬ自画像野火走る	富澤さち子	125	10
血脈に不連続線みみず鳴く	長濵　聰子	125	10
干されれば笑うしかない目刺かな	保坂　末子	126	3
石ころを踏み短日のふくらはぎ	山口　彩子	126	4
鉛筆を削り言葉を削る夏	森　章	127	4
高速道盆の月まで駈け上がる	三浦　侃	127	4

興津　恭子

句	作者名	号	頁
映す山なき下総の田水沸く	越野　雄治	124	2
朱夏淡路神話の国へ鈴緒振る	鈴木加寿子	124	3
蛇穴を出てしなやかに生き直す	鈴木まんぼう	124	3
竹の秋純な人からいち抜ける	寺田美津江	125	8
囀りを聞き分けているパンの耳	直江　裕子	125	9
修正のきかぬ自画像野火走る	富澤さち子	125	10
今生の余熱で挑む寒詣で	三好美穂子	126	4
流灯会岸を離れぬ妣がいる	田村　隆雄	126	4
虚ろなる風のかたちの蛇の衣	長井　寛	127	4
秋声や角を曲れば暮れてをり	飯島　昭子	127	5

小張　直子

句	作者名	号	頁
折鶴になる処方箋寒北斗	小林　俊子	124	2
梅雨寒や当てなきときの盆の窪	久野　康子	124	2
子育ての頃懐かしむ福寿草	千葉　智司	124	3
天空はいつも憧れ花こぶし	中村　冬美	125	10
雲の峰黙は女の挑戦状	長濵　聰子	125	10
切れと間の美のありにけり遠花火	実籾　繁	126	2
干されれば笑うしかない目刺かな	保坂　末子	126	3
泣きどころ抑へやんまの大を追ふ	伊藤　希眸	127	5
追伸を書こうよ虹の消えぬ間に	青木　一夫	127	6

夕焼をはがいじめする純老女　山中　葛子　127 6

雲の峰黙は女の挑戦状　長濵　聰子

此の俳句を一読した筆者は作者の心情を良く理解する事が出来た。黙と言うひと言の中に女性特有の心理が有る。女は何か事が起こると真っ先に自分の心の殻に閉じ籠り相手の出方を観察する。即ち黙って相手を観察し自分を有利にするのだと思う。女の挑戦状とは面白い表現。作者の豊かな人間性を垣間見たようで嬉しい時間を共有出来た。又、雲の峰の季語も素晴らしい。

飯島　昭子

百咲いて百のさみしさ浜昼顔　髙橋由紀子　124 3
葉桜や戦はいつも隠れゐて　髙橋　由樹　124 4
弔ひの終はりてひとり花の雨　村田黙己春　126 2
頃合をぶつぶつ急かす栄螺かな　福田志津子　126 3
思い出をまた捨ててゐる更衣　柳沢　純　126 3
落葉踏む残り時間は気に掛けず　三好美穂子　126 4
ひまわりの千の沈黙地震の海　若林　佐嗣　127 5
病院に母捨ててくる花満開　東　國人　127 6
田を植えてつくづく今日を見ておりぬ　石井紀美子　127 6
その日まで踏ん張つてみる西行忌　池田　和人　127 6

三須　民恵

関ヶ原は雪です獅子舞の大口　武田　伸一　125 8
赤の他人六人寄れば芋煮会　並木　邑人　125 8
芹の青根っこの先までがふるさと　直江　裕子　125 9
亀鳴くやお袋という無限大　長濱　聰子　125 10
初空の落款として梅一輪　中山　皓雪　126 2
自己主張強くて孤独白つばき　三苫　知夫　126 2
昭和の日昭和をけずる乾物屋　矢野　忠男　126 3

血液さらさら炎天のぐらぐら　細根　栞　126 4
蜆汁ひとりにさせてしまいけり　渡辺　澄　127 5
潮汁いのち丸ごと裏返る　浅野　文子　127 6

吉野　精

歓喜せる苺溢れし洋菓子屋　棗　椿伊　125 9
はくれんは真夜の灯台おかあさん　林　ゆみ　125 9
桜並木どこでも幸せの入口　原島　典子　125 10
街に灯がともる時までチューリップ　半田　千枝　126 2
昭和の日昭和をけずる乾物屋　矢野　忠男　126 3
彼の世へもゆっくり進むかたつむり　山口　夕紀　126 4
あいつが死んでからずっと冬晴れだ　三宅たくみ　127 4
昼星の落ちて椿となりゆけり　長井　寛　127 4
風光るいつも列からはみだす子　秋谷　菊野　127 4
白菜を割れば顕る観世音　井上けい子　127 5

白菜を割れば顕る観世音　井上けい子

白菜と観世音のとりあわせが佳い。白菜の中身のみずみずしきその彩。貴い観世音のかんばせに通ずる。

重田　忠雄

折鶴になる処方箋寒北斗　小林　俊子　124 2
春の蝶生まれる前から斜陽族　白木　暢子　124 2
密談の卓に蜜入り冬林檎　椿　良松　124 3
吊橋を猪来るよくよくの夜であり　武田　伸一　125 8
まだ哲学している手袋の片っ方　普川　洋　125 8
血脈に不連続線みみず鳴く　長濱　聰子　125 10
春愁に餌を与えて飼っている　安田　時空　126 3
今生の余熱で挑む寒詣で　三好美穂子　126 4
ゆうやけを掃き寄せている部活の子　石井紀美子　127 6
夕焼をはがいじめする純老女　山中　葛子　127 6

第55回現代俳句全国大会

作品募集

投句締切は7月31日（必着）

現代俳句全国大会は、年に一度、現代俳句協会が主催（毎日新聞社後援）して行う伝統のある大会です。協会員に限らずどなたでも参加できますので、例年にも増してたくさんのご応募をお待ちしております。応募規定他詳細は「現代俳句」4月号を参照下さい。

❏❏ 津田沼研究句会報告 ❏❏

（於：津田沼一丁目町会会館）

●第三〇九回（平成三十年二月十三日）

司会　横須賀洋子

古民家の竈の匂ひ春の雨　深山きんぎょ
吹きっさらしの檻に吊られし猪の皮　佐藤　晏行
東京に憧れている雪女　大塚　弘毅
犬の仔は孫の弟日向ぼこ　前島きんや
ご自由にお持ち下さい北の春　松﨑あきら
生きるヒントの数だけある遺品　白木　暢子
木の芽晴弥勒菩薩は指を立て　金子　未完
もともとは相思相愛鬼は内　横須賀洋子
我にして二重人格サイネリア　小林　実
老梅ポツンしがらみもみんな捨て　なかもと淑子
喜寿の春人肌の酒と恋の句を　徳吉洋二郎
残雪や寝ぐせの髪の駅急ぐ　イザベル真央
寒入日大樹両手を拡げきる　股野　久子
立春のたたら踏みたる長電話　村上　澄子
この星をいぢめつくして白い雪　岡田　淑子
雪晴れや「いっちゃん御守り」買ひに行く　檜垣　梧樓
早逝のごとき春雪忘れ水　池田　博臣
椿落つスマートホンをはなさない　吉野　精

●第三一〇回（平成三十年三月十三日）

司会　徳吉洋二郎

陽炎の骨あるように立ちにけり　秋尾　敏
七年を雨降るごとく受け入れる　白木　暢子
平成は伸びきった輪ゴム朧月　金子　未完
たはむれに蝶に手を出し立ちくらみ　佐藤　晏行
紙その他いろいろ束ねる四温かな　岡田　淑子
うつし世の影のざわめき吊し雛　徳吉洋二郎
蒙古斑あさって春が来ると言う　なかもと淑子
旅人のみんな背嚢霞立つ　池田　博臣
雪解けの越後つついし人攫い　小林　実
月おぼろ極上の水零しこぼし　横須賀洋子
蛇穴を出づアツアツの牡蠣フライ　村上　澄子
カー娘「そだねー、そだねー」と戦へり　檜垣　梧樓
寒の犬主宰の俳句がつまらない　松﨑あきら
春昼の権田原交差点いかに　イザベル真央
独り者出し放しの雛納め　大塚　弘毅
春の水九条のせて児らの辺に　吉野　精
春ともし十一階に人の住む　股野　久子

●第三一一回（平成三十年四月十日）

司会　イザベル真央

フラスコの中の夕焼西東忌　岡田　淑子
タンポポに商船学校練習船　イザベル真央
杭一本一本ずつに遠流の鵜　小林　実
桜の夜立入り禁止の過去がある　徳吉洋二郎
美しき神の数式糸ざくら　深山きんぎょ
和を以てこける自転車春の泥　佐藤　晏行
帰去来　都会のさくらは皆同じ　松﨑あきら
菫咲く未来が過ぎて行く前に　白木　暢子
花びらの街をめぐりて酔いもせず　横須賀洋子
ラジオ体操第三もよし花菜風　檜垣　梧樓
飛花落花無意識層にとどまりぬ　金子　未完
飛花落花ビニールシートの将棋指し　前島きんや
藤の花野良猫あくび切りもなし　股野　久子
筍を茹でて明日の胸算用　なかもと淑子
土くれと春のたけのこ大宇宙　池田　博臣
朝桜夕日のさくら漢の忌　吉野　精
産直の野菜が売られ遅桜　村上　澄子
春一番天の上から鳳凰鳥　大塚　弘毅

❏❏ 青葉研究句会報告 ❏❏

（於：千葉市民会館）

●第七十九回（平成三十年二月二十二日）

司会　たけなか華那

踏まれてもおおいぬふぐりの儘でいい　加藤　法子
エリカはもう空のハッチをあけていた　たけなか華那
春愁にあらずレモンを絞り切る　越野　雄治
霾るや終末時計の秒針に　長濵　聡子
枝分れして家系図の春惑い　三須　民恵
雁風呂や時間の小枝ぶら下がる　並木　邑人
涅槃西風只今キムチ発酵中　小林　実
雪はいずれ神となる子をくくみをり　松﨑あきら
枝打ちや耳削ぐ音を立て寒風　石井紀美子
梅一分枝もたわわに恋みくじ　徳吉洋二郎
にんげんの枝葉末節春朧　池田　博臣
陽炎の枝に足掛け落ちるなよ　秋尾　敏
白鳥の帰る背中を押してやる　細根　栞
浮氷乗ったら黄泉に行けますか　細野　一敏
皆既月食焼肉食ひにけり　山﨑　幸子
われ小枝剪定されず初恋を　吉野　精
八重山の枝の呟き寒明ける　長井　寛
しだれ梅枝に雫の一つずつ　馬渕　津枝
海坂の枝葉の末ぞ八十の春　矢野　忠男
大鵬の髷黒黒冴返る　鈴木まんぼう

●第八〇回（平成三十年三月二十二日）

司会　越野　雄治

花篝からだの中の夜の川　越野　雄治
陽光の川幅でくる桜桃忌　石井紀美子
蛇穴を出て正面に防犯カメラ　加藤　法子
雪解川あすは戦場かけめぐる　徳吉洋二郎
どちらにも廻る地球儀地虫出づ　鈴木まんぼう

ゆらゆらり川の字崩る春の午後　三須　民恵
闘いを楽しめ春は短いぞ　松﨑あきら
荒れし野の鬱より序曲揚雲雀　長濵　聰子
奪衣婆と三途の川に残る鴨　細根　栞
人体損傷空洞に薄桜　細野　一敏
バーボンの揺れ闇の夜のつるし雛　池田　博臣
母の忌日いつもながらに桜咲く　山﨑　幸子
書換えの咎を背負いし紙鳶　並木　邑人
花あくた身の内の川二級なり　吉野　精
雪解川触れ合いがいい自由がいい　馬渕　津枝
わたし等に闇はないよ落し角だよ　たけなか華那
そよ風に本身の重さ人麻呂忌　小林　実
白鷺の身分落して冬の溝　棗　椿伊
梅咲いて浄土ヶ浜に立つ兜太　長井　寛
花便り瀬音広がる丸木橋　矢野　忠男

●第八十一回（平成三十年四月二十六日）
司会　長濵　聰子

一が好き二はもっと好きつくしんぼ　加藤　法子
認知症なんてへいちゃら葱坊主　細根　栞
追憶やおぼろに結ぶ点と点　長濵　聰子
祭笛結んでみせる貝ノ口　矢野　忠男
結論は出ないがよろし桜餅　細野　一敏
春宵やギリシアの壺へ詩のかけら　越野　雄治
見えぬけど結ばれている花衣　小林　実
結局は亀鳴く闇のミステリー　馬渕　津枝
ゆるりと夜明け結城の町のかたつむり　石井紀美子
初夏の紐革饂飩結べない　山﨑　幸子
春暁の玄関にあるさらの靴　吉野　精
駒形のどぜうは煮えて春の雪　棗　椿伊
夏草や少年いまや悪宰相　松﨑あきら
是がまあ老いの定めや春の風邪　鈴木まんぼう

新緑の風クレヨンを転がせる　三須　民恵
昭和の日ストッキングの伝線す　徳吉洋二郎
桜蕊ふる六本木裏の印象派　池田　博臣
ほととぎす鳴きても結局想起せず　長井　寛
田の神の春睡結という掟　並木　邑人
好物は結束白滝種痘の子　たけなか華那

□ 柏研究句会報告 □

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第六十九回（平成三十年二月十日）
司会　髙橋　宗史

賢治の宙（そら）神ギシギシと星座組む　松澤　龍一
霞立ち膨らんでゆく水の音　長井　寛
丹頂の求愛空の在るかぎり　佐藤　鈴子
手の平に刻のゆるめりはだら雪　野口　京子
ぬかるみを行く縄文の地を訪ね　髙橋　宗史
早春の屋根の奥より読経の声　井上けい子
五欲より五感衰へ春落葉　岡田　春人
わがままに芳潤に雪降りにけり　下村　洋子
間引き絵馬春雷響くばかりなり　木之下みゆき

●第七〇回（平成三十年三月十日）
司会　長井　寛

猫どちの不協和音や春深む　栃木　きよ
トラック島発つ反骨の春の星　野口　京子
啓蟄や駅まで往復一万歩　岡田　春人
素の母を追っても追っても藪つばき　下村　洋子
点滴の車からから梅三分　佐藤　鈴子
冬の蝶風の寡黙に身を添す　小張　直子
天と地の倒錯枝垂れ桜かな　髙橋　宗史
戦なき世へ青鮫の火を消さじ　松澤　龍一
復興の町に旗揺れ風光る　井上けい子

辛夷の花いまだ毛囲ひ空に座す　伊藤　希眸
明鏡止水の片翳鳥帰る　長井　寛

●第七十一回（平成三十年四月十四日）
（於：麗澤大学キャンパス・吟行）
司会　長井　寛

蒲公英とヒトツバタゴの密談中　栃木　きよ
引揚げて七十年や楷若葉　岡田　春人
マロニエやアンニュイを舐む飴ひとつ　佐藤　鈴子
花過ぎのキャンパスにある憂ひ　井上けい子
花みずき自負をはらりと解き放つ　下村　洋子
道徳は日々疎し清明のカラス　木之下みゆき
一文字に賭ける俳諧花は葉に　長井　寛
遅れ来た青年の笑み八重桜　髙橋　宗史

新会員・会友紹介

野田市二ツ塚　島　隆史（会員）
（推薦者　秋尾　敏）

ひとときの空見て沈む流し雛
掛軸の隙間に目あり嫁が君
青春の微光を手繰る夏の海

船橋市北本町　佐藤　直子（会員）
（推薦者　秋尾　敏）

旅立ちは軽めのリュック風光る
どの色も笑顔のかたちチューリップ
韋駄天の光るくるぶし夏近し

千葉市稲毛区　森井美恵子（会員）
（推薦者　松本　千花）

草の芽や一年生は二年生
清明や昆布やはらかく昆布水
鵯鳩雀一列はるまつり

図書紹介

■句集『夢祝』　塩野谷　仁

平成三十年三月十日刊　邑書林

にわとりが白く吹かれている晩夏
人の死に船橋地方雪くるか
蜻蛉より遠いところを日暮とす

■句集『旅』　山﨑　幸子

平成三十年四月四日刊　現代俳句協会

推敲せよ泥葱洗ふやうにせよ
大根蒔く地球に穴をあけながら
人消えて人立ちあがる芒原

ひろば

■現代俳句協会役員改選

平成三十年三月二十四日の総会において役員改選が行われた。千葉県関係者は次の通り。

（○印新任）

副会長　○秋尾　敏
幹　事　○長井　寛（『現代俳句』編集部長）
〃　○津高里永子（出版部長）
監査役　塩野谷仁
理　事　○高木一惠　○並木邑人　髙橋宗史
顧　問　○鳴戸奈菜　山﨑　聰
退　任　横須賀洋子　武田伸一　佐藤映二

■受賞のお知らせ

◆第二十回長塚節文学賞俳句大賞
ひと粒の雨に始まり夕立来る　山﨑　幸子

◆第十九回ＮＨＫ全国俳句大会高野ムツオ特選
堅香子や嬥歌の山を目覚めさせ　田端　重彦

◆第二十四回全国俳誌協会賞
憲法記念日山椒魚は動かない　東　國人

■野田俳句連盟春季俳句大会開催

四月二十一日（土）第一四八回大会が野田商工会議所で開催された。出席者・欠席投句者あわせて、八十五名の参加。当季雑詠二句と席題一句。席題は「草餅」だった。

（髙橋宗史 記）

【上位入賞者】（三句合点）代表句　○内は順位

市長賞
花満開どこで息つぎいれようか　星野　一惠

議長賞
花終わり眼から力を抜く仁王　戸邉　光一

教育長賞
マラカスのリズムよ花の種袋　千葉　智司

連盟賞
あの家もこの家も留守蝶の昼　保坂　末子

⑤東京を向こうに回す揚雲雀　秋尾　敏
⑥春昼を壊さぬように釘を打つ　青木　一夫
⑦草餅に母の哲学引き寄せる　木之下みゆき
⑧光りつつ老い光りつつ春惜しむ　椎名　鳳人
⑨紫木蓮けむりのように老いてゆく　小野　功
⑩初蝶や紋の重さを知らず発つ　小張　直子

■市原市春季俳句大会

四月二十二日、五井会館にて野口糸朗植草学園大学名誉教授を招聘して開催。兼題の部は県内外から六百句、当日の席題句会は六十名の出席を以て実施した。

（並木邑人 記）

☆兼題の部／桜餅・平・雑詠三句一組

市原市長賞
平がなでつづる恋歌柳の芽　内田　聰子

市原市俳句協会賞
水平に止まるシーソー春の昼　丸　房代

市議会議長賞
つばくらやかつて特攻発ちし空　松本　正子

教育長賞
サッカー場少年ひとり春を蹴る　丸　喜久枝

☆席題の部／行く春・遠足

市原市長賞
行く春やはなし相手といふ介護　丸　喜久枝

市原市俳句協会賞
行く春や履く人のなき靴みがく　鈴木　喬二

市議会議長賞
遠足の声下りてくる天守閣　松本　正子

教育長賞
遠足や仏足石をくすぐる子　大関　博美

《会員・会友の近況》

・参加していた句誌「源流」が休刊となりとても残念な気持ちでいっぱいです。発表の場がなくなるのは寂しいです。でも今は、「現俳」の「テーマの一句」の投稿が楽しみになっています。

（齋藤　溥子）

・今は三月下旬、いつになくお花が一気に咲きました。河津桜が一番先、彼岸桜・紅梅・白梅・雪柳・花馬酔木・紫荊・花海棠・チューリップ等々。カメラを向けることにも飽き足らず、咲き誇るお花に酔いしれる日々。とても幸福な気分となります。平凡な日常に目を向け実感のある句作りを重ねていきたいと思います。（金澤　恵子）

・とうとう花粉症の仲間になってしまいつらいです。待ちに待った春なのに、花なのに。（里見　さち）

・人生の落し穴にすぽっと嵌ってしまったかのような昨年、半年近い入院を経て、現在は、今までで一番俳句が好きになっております。（島田　翠松）

・諸家近詠の互選を通じてお近づきになれる句友がいて楽しみです。それを励みにしてまだまだ頑張ります。（國分　三徳）

・津田沼周辺の様子にもだいぶん慣れて来ました。千葉県現代俳句協会の吟行会に参加出来ればと思いますが、会場までに行く自信がなく、もう少し詳しくなれば参加させて頂きたいと思っています。（口村　洋子）

・塗箸で小豆を摘むより、臍で茶を沸かすほうが楽か、俳句は難しい。多分。（小林　実）

・なかなか句会に出席できません。しかし、「秋」には、インターネット句会があり、そこで俳句を楽しんでおります。今の時代ネット句会も良いものですね。（鈴木　房州）

・主人が死亡して二年半になりますが、まだまだ心が痛む時があります。俳句で夢中になれるので救われます。（佐々木　禎）

・冬の寒さに股関節と膝の変形に伴う痛みで歩けなかったのが、暖かくなるに従い痛みがやわらいで来て、少しずつ歩けるようになって来ました。（菅ノ谷文子）

・野田の俳句連盟では来年の春季大会が数えて一五〇回になりますので、現在その記念大会の準備中にあります。連盟発足は昭和二十二年でありますから、先輩の方々のこれまでのご尽力に感謝しつつ、継承して行くべく責任を痛感しているこの頃です。（椎名　鳳人）

・あるがまま日常をていねいに切り取って、季節の移り変わりを俳句にしてゆけたら良いと思います。何歳になっても感動を大切に、名句に会い、又健康に留意して最高のものを舞いたいと願うところです。（末廣　陽惠）

・退職後始めた句作も九年目になります。なかなか上達しませんが俳句の奥深さに魅力を感じています。作句を通して心豊かに成長していきたいと思います。（小多田文子）

掲示板

《会員・会友異動》

●**入会**（会員）上杉良身、大薗智子、林　哲

●**退会**（会員）漆畑遊気、大村錦子、神尾浄水、塩川昭子、椿　良松、水戸吐玉、渡邊廣子、原島典子、山田ひろ子

❑❑ 事務局・編集部だより ❑❑

●事務局を担当していて、今、何より課題として見えてくるのは会員の漸減です。近くの方にこんな声掛けをしてみたらどうでしょう。「俳句を作ってみませんか」「現代俳句協会に入りませんか」…無論誤解の無いようにしつつですが。

●今号から会員の皆さんが全国規模の俳句大会で大賞及びそれに準ずる賞を受賞された場合、紹介するコーナーを設けました。情報を入手された方は編集部までご一報下さい。

現代俳句千葉　第一二九号
平成三十年六月一日発行
発行人　千葉県現代俳句協会
会長　秋尾　敏
現代俳句千葉編集部
〒261-0004 千葉市美浜区高洲三－十五－六－一六〇二
徳吉洋二郎
千葉県現代俳句協会事務局
〒278-0043 野田市清水五二七－一〇
髙橋　宗史
TEL・FAX 〇四－七一二五－三三八二